

越後街道白坂宿

白坂村は会津藩が寛文10年(1667)に一里三十六町制に改めて一里塚を築き、街道を整備した時に駅所として確立したと思われます。『野沢郷毎村委記』によると、白坂村と宝川村は寛永4年(1627)に野沢郷から小川庄に入り、海道組に組み替えとなりました。これは、駅所整備に関係があるからだと考えられます。

白坂の宿は、旅人の宿よりは運輸通信事務が中心の駅で、寛文5年(1665)には18軒、文化6年(1809)には21軒と小村でした。また、寛延2年(1749)の記録によると、上野尻の駅馬は65匹なのに対し、白坂駅では藩の駅馬購入が12～13匹と駅馬数が十分ではなく、公用で旅する人の荷物を宿場から宿場へとリレー方式で受け継いで送る「継送り」に支障をきたすため、宝川と半月ずつ交代で行っていました。一月のうち1～15日(上番継)は八ツ田→白坂→上野尻と継送り、16～30日(下番継)は上野尻→白坂→八ツ田へと継送りをしていました。

宝暦2年(1752)、白坂村では藩の駅馬購入貸付制度で馬の購入金を借り、駅馬を32匹に増やし、滞留解消を図っています。また駅所収益のため、禁じていた村内での酒販売を通行人と村人には限って売ることを村中相談の上で行うなど、さまざまな努力をして継送りに支障がないようにしていました。

しかし、江戸時代後半になると低運賃の公用荷の増加と、駅所を通らず直通で荷物を送る中追が増え、駅所は窮乏を来すとともに、村の若者に疱瘡が流行するなど、継送りの停滞解消は大変困難になりました。

なお、白坂村には端村として川谷、屋敷、榎木平、熊沢、柞畑がありましたが、文政2年(1820)に屋敷、榎木平、熊沢、柞畑は屋敷村となっています。



現在の白坂宿

今月の表紙

今月は8ページでも取り上げた東京2020オリンピック聖火リレーより。当日は風が強かったものの天候にも恵まれ、聖火リレーを取材できるという貴重な経験をする事ができました。

編集後記

5月号を編集した4月上旬は、入学式や辞令交付、新しい事業の開始など、取材の機会がグンと増えます。広報紙担当になった1年前、初めて外に取材に行ったのがこゆりこども園の入園式でした。その時はカメラの操作もままならず、壇上が上がって撮影することに消極的でした。今では自然と壇上が上がって良いアングルを見つけていることに必死になっていますが、なかなか上手く撮ることができません。その時の様子が一目で分かる写真を撮れるよう、引き続き精進していきたいと思っています。(泰)